アウグスティヌスとストア哲学

―『問答法について』第六章〈言語起源論〉を中心に―

水落健治

1 序

紀元三八七年、アウグスティヌスは洗礼志願者としてミラノに滞在していた折りに、「諸学芸に関する書物」disciplinarum libri を書き始めた。彼は、友人たちとの議論の中で、彼らを「物体的なものから順次非物体的なものにまで導く」べく、文法学、音楽、問答法、修辞学、幾何学、算術、哲学に関する書物を書き始め、そのうちの『音楽論』については、その後アフリカに戻ってからもなお執筆を続け、第六巻まで完成したことを自ら語っている。(1)

そして現在『問答法について』*De Dialectica* の名のもとに収録されている小品こそ、その時アウグスティヌスが執筆し始めた著作にほかならないと長い間信じられ続けて来た。十六世紀に出版された三種類のアウグスティヌス全集、すなわち Johannes Amerbach 版全集（一五〇六年）、Erasmus 版全集（Basel, 一五二八～九年）、Louvain 大学版全集（Antwarp, 一五七七年）は、いずれも『問答法について』の著者をアウグスティヌスに帰している。(2)

だがこの前提は、マウリナ版の編纂者たちによって覆されることになる。彼らは、アウグスティヌス全集に収録されている初期アウグスティヌスの四つの小品、すなわち

『文法学』*De Grammatica*、『問答法の始め』*Principia Dialecticae*、『十のカテゴリー』*Categoricae decem*、『修辞学の始め』*Principia Rhetoricae* について、

1　これらが「対話篇の形式」をとっていないこと
2　これらの内にキリスト教の色彩が希薄なこと
3　これらの内容が独創性に乏しく通俗的であること
4　『訂正録』一・七末尾にあるとされた『文法学』冒頭の引用が写本上疑わしいこと

という理由に基づき、これらを「疑わしい小品」suppositia opuscula と見なし、これらの真作性に疑念の一石を投じた。[3] そしてこの問題提起以降、『問答法について』は、その著者および内容について数々の批判にさらされ、また研究の対象とされて来たのである。

『問答法について』をめぐるこれまでの長い論争の中で特に問題となって来たのは、「『問答法について』の内容がストア的性格を有している」という点である。本文を一読すれば分かるように、ここにはきわめて多くのストア起源の用語、概念、定義が出現する。今思いつくままにそれらを列挙してみると、それらはたとえばつぎのようなものである。

1　『問答法について』は「問答法とは、よく議論することの知識である」dialectica est bene disputandi scientia という定義によって始まる。だが、この定義はストア派の διαλεκτική の定義、「問答法とは、よく議論することの知識である」διαλεκτικὴ δὲ ἐπιστήμη τοῦ εὖ διαλέγεσθαι (*SVF* 三・二六七、Andronicus περὶ θαθῶν p.20f.) に酷似している。

2　〈ことば〉は〈単純なことば〉と〈結合したことば〉とに区分されるが、『問答法について』第二章では〈結合したことば〉verba coniuncta が（一）「文を形作るもの」（完全な文）と（二）「文を形作るためにさらに何かを必要とするもの」（不完全な文）とに区分され、前者がさらに（一・一）「真か偽のいずれかのもとにあるもの」（命題）と（一・二）「肯定・否定が不可能なもの」（命令文、嘆願文、呪詛文等）とに区分されている。だがこの区分は、ストア派による「文」

λόγος の区分そのものである。

3 『問答法について』第五章では、〈ことば〉verbum のモメントとして（一）それ自体として発せられることばとしての〈ことば〉verbum、（二）何か別のものを表示するために発せられる〈語り〉dictio、（三）ことばを知覚した際に魂に懐胎されるもの conceptio としての〈語られうるもの〉dicibile、および（四）〈もの〉が区別されている。だが、ここで語られる〈語られうるもの〉dicibile は、言語的に、ストアの「レクトン」λεκτόν のラテン訳のように思われる。

4 『問答法について』第六章では、「ストア派の人々の意見では」Stoici autumant という明確な規定のもとに、言語の起源を擬音語・擬声語に求める詳細な言語起源論が引用・紹介されている。

5 『問答法について』第八～一〇章では、問答法遂行に際しての「妨げ」impedimentum として、言語の「曖昧さ」obscuritas と「多義性」ambiguitas とが区分され、これらについての議論が展開されるが、この区分は *SVF* 二・一五二に現れている。

このように、『問答法について』には多くのストア起源の用語、概念、定義が現れ、これらが研究者をして著作の真作性を疑わせしめてきたのである。

そこで本稿では、このような研究状況を踏まえつつ、『問答法について』第六章において「ストア派の人々の説」として引用・紹介される「言語起源論」に焦点をあて、これが『問答法について』において語られる脈絡とストアの言語理論において語られる脈絡とを比較・対照することにしたい。われわれは、この作業によって、ストアの言語理論と『問答法について』のそれとの間に存する大きな隔たりを浮き彫りにすることができるであろう。

2 『問答法について』における〈言語起源論〉の位置

まずわれわれは、『問答法について』第六章において語られる言語起源論がいかなる脈絡で語られるのかを確認するために、第六章に至るまでの議論を概観しておくことにする。

『問答法について』第一章は次のことばで始まる。

問答法とは、よく議論することの学である。しかるに、われわれが議論するのは〈ことば〉によってである。この場合〈ことば〉は単純であるか、結合したものであるかのいずれかである。

このことばに続いて、〈単純なことば〉verba simplicia と〈結合したことば〉verba coniuncta との区分は「その語が dis-putare のような複合語であるか否か」という観点において行われるのではなく、むしろ「その語が何かひとつのもの unum quiddam を意味表示 significare するか否か」という観点において行われるものであることが確認され、まず、〈単純なことば〉がいかなるものであるのかが様々な実例によって示される。

第二章では、〈結合したことば〉の定義が「相互に結合して複数のもの res を意味表示するもの」として与えられ、これが（一）「文 sententia を形作るもの」（完全な文）と（二）「文を形作るためにさらに何かを必要とするもの」（不完全な文）とに区分される。そして前者がさらに（一・一）「真か偽のいずれかのもとにあるもの」（いわゆる命題）と（一・二）「肯定・否定が不可能なもの」（命令文、嘆願文、呪詛文等）とに区分され、[4] 命令文、嘆願文などが、問答法の対照である「議論」には関わらないことが示される。

第三章では、真偽が問題となる文（命題）の種類として（一）単純な命題 sententia simplex と、（二）結合した命題 sententia coniuncta とがあることが示される。そして、結合した命題の真偽の判断が、一個々の命題の真偽によるのではなく一、個々の命題から導き出される「結論」summa によって行われることが示される。

第四章では、これまでの議論を承けて問答法 dialectica の区分が次のように示される。

1 de verbis simplicibus (materia dialecticae)
..... de loquendo
2 de verbis coniunctis (opus dialecticae)
(a) non implentibus sententiam
(b) implentibus sententiam
i nondum facientibus quaestionem
vel requirentibus disputatorem
..... de eloquendo

ii de sententiis simplicibus iudicetur
..... de proloquendo
iii de ipsa copulatione iudicetur
donec perveniatur ad summam .....
..... de prologuiorum summa (5)

以上第一章から第四章までの議論は、問答法の学問区分を導き出すために行われた「序論」であったが、第五章から『問答法について』の「本論」が始まる。考察は、上記の区分に従い、〈ことば〉を個々のものとして扱うことからはじまる。そしてまず〈ことば〉verbum の定義が次の連鎖において行われる。

〈ことば〉は、いかなる〈もの〉の〈しるし〉でもある。これは〈語るもの〉によってもたらされると、〈聴くもの〉によって理解されることが可能である。およそ〈もの〉は、感覚されるか、理解されるか、あるいは隠されているかのいずれかである。

〈しるし〉とは、それ自体が感覚されるものでありながら、それ自体とは別に何かを魂に示すもののことである。

〈語る〉とは、分節に分かれた声によって〈しるし〉を与えることである。私が「分節に分かれた」と語るのは、〈文字〉によって捉えることが可能なものことである。

Verbum est uniuscuiusque rei signum, quod ab audiente possit intellegi, a loquente prolatum. Res est quidquid vel sentitur vel intellgegitur vel latet. Signum est quod et se ipsum sensui et praeter se aliquid animo ostendit. Loqui est articulata voce signum dare. Articulatam autem dico quae comprehendi litteris potest.

ついで、いわゆる「文字」littera が音声としての〈ことば〉の〈しるし〉であることが示され、「〈しるし〉の〈しるし〉」signum signorum（メタ言語）の存在が確認される。そしてかかる「〈しるし〉の〈しるし〉」を用いることによって初めてわれわれは言語そのものについても議論 disputare することができること、これらの議論は、それが議論である限りにおいて問答法に関わることが示される。

そして、この「言語についての言語を媒介とする議論」の考察を手掛りに、「ことば」verbum を構成する四つのモメントとして、（一）それ自体として発せられることばとしての「ことば」verbum、（二）何か別のものを表示するために発せられる「語り」dictio、（三）ことばを知覚した際に魂のうちに懐胎されるもの conceptio としての「語られうるもの」dicibile、および（四）「もの」res が導き出される。第五章の末尾では、これらのモメントについて論じることが問答法の課題であることが示され、この課題が、〈ことば〉の有する「〈しるし〉の〈しるし〉」としての機能を前提して初めて可能であることが再確認されている。

われわれが見ようとする〈言語起源論〉の記述は、これらの四つのモメントの内の第一である〈ことば〉についての議論の中で現れる。第六章の冒頭は次のように始まる。

したがって、およそ〈ことば〉なるものについては、……音として響くものを別として、必然的に、四つのことがらが問題となる。すなわち、〈ことば〉の起源、力、活用、配置である。

こうして、この語につづいて、ストア派の〈言語起源論〉の教説が詳細に引用・紹介されて行くのである。以下われわれは、テキストを見て行くことにしよう。

3 『問答法について』第六章における〈言語起源論〉のテキスト

〈ことば〉の起源についての探求は、その〈ことば〉について「一体どこからそういう音声として発せられるのか」unde ita dicatur ということが探求されるときに行われる。

……

さて、キケロがこの問題（＝〈ことば〉の起源の問題）に関していかにもキケロらしい仕方で嘲笑したストア派の意見によると、およそ〈ことば〉verbum には、その起源について説明不可能なものはないのだ、という。そしてもし誰かが「このことにはきりがないではないか」、すなわち、「特定の〈ことば〉の起源を幾つかの〈ことば〉によって解明（解釈）し、それらの起源をさらに探求することにはきりがないではないか」と語るとするなら、そのよ

うな仕方で彼ら（ストア派の人々）を脅かすことは容易であった。そこでストアの人々は、語源の探求を「何かの〈もの〉が〈ことばの音〉と一致して響く」まで行えばそれでよいのだと語っている。たとえば私達が「青銅のチャララン」aeris tinnitum、「馬のヒヒーン」equorum hinnitum、「羊のメーッ」ovuium balatum、「ラッパのトテーッ」tubarum clangor、「鎖のガチャガチャ」stridor catenarum と語る場合である。つまり、読者諸氏は十分分かるであろうが、これらの〈ことば〉は、これらの〈ことば〉によって意味表示されているもののように響くからである。

しかしながら、〈もの〉の中には音を出さないものもある。そこで彼らは、それらのことがらについては〈接触の類比〉similitudo tactus を適用する。たとえば、もし何かがツルツルとした仕方、ないしザラザラとした仕方で感覚に接触する場合には、字母の滑らかさ、ないしザラザラさ lenitas vel asperitas litterarum が聴覚に接触し、たとえば、私達が“lene”（滑らかなもの）と語るとき、“lene”という語それ自体が“leniter”（滑らかに）響く、そのような仕方で名前を産むのだ、というのである。同様に、一体誰が、“asperitas”（ザラザラした）という語が“aspera”（ザラザラしたもの）であることを、その名前自体によっても判断しないだろうか。私たちが“voluptas”（快楽）と語るとき、耳には「滑らかなもの」lene があり、“crux”（十字架）と語るときには「ザラザラしたもの」asperum がある。かくして、

〈ことば〉が感覚されるのと同じ仕方で、〈もの〉それ自体が（私達に）動きかける afficere

のである。“mel”（蜂蜜）は、（蜂蜜という）〈もの〉自体が甘い仕方で suaviter 味覚に働きかけるが、それと同じ仕方で名前において滑らかな仕方で聴覚に接触する。“acre”（苦いもの）も二通りの仕方でザラザラしている。“lana”（羊毛）と“vepres”（刺のある低木）も、これらの〈ことば〉が聴こえるその通りの仕方で接触される。

こうして、彼ら（ストア派の人々）は、以上のようなもの、すなわち、「ものの感覚」と「ことばの感覚」とが一致するような場所が≪ことばの揺り篭≫cunabula verborum である、と信じているのである。

ここから、（ストア派の人々は）、命名の自由 licentia nominandi がさらに進んで〈もの〉相互の類似関係にまで至ったと考えている。例えば“crux”（十字架）がこう

呼ばれるのは〈ことば〉それ自体の「ザラザラ」asperitas が（十字架という）〈もの〉によってもたらされる痛み dolor の「ザラザラ」と一致するからであるが、他方、“crura”（“crus”「足」の複数形）は、痛みの「ザラザラ」asperitas doloris のゆえにそう呼ばれたのではなく、むしろ“crura”が、その長さと強固さ durities とにおいて、他の肢体以上に〈十字架の木〉と似ているからなのである。

そこから、彼らは、〈ことば〉の拡張用法 abusio にやって来た。すなわち、類似の〈もの〉の名前ではなく、いわば近くの〈もの〉の名前が採用される場合である。すなわち、“parvum”（小さい）と“minutum”（減少した）との意味は、いかなる類似物を持っているだろうか。というのも、何かのものが決して減少しつつあるのではなく、むしろ何か増大 crescere しつつある場合でも、そのものが小さい parvum ということもあり得るからである。にもかかわらず、私達はある親近性のゆえに、“parvum”の代りに“minutum”と語る。だがこの語の拡張用法は語る人の意図次第である。なぜなら、その人は“minutum”という語を語る必要がないために、“parvum”という語を持っているのだからである。

以上のことがらは、私達が今示そうとすることがらについて一層適合する。すなわち、浴室の“piscina”（養魚場、生簀、浴槽）が語られるときには、その中には「魚」pisces は全くおらず、魚に似たものも全くないのであるが、しかし、この語は「魚」pisces の棲息所たる「水」aqua のゆえに「魚」からそう語られているように思えるのである。したがって、この語 vocabulum は「類似によって転用された」translatum similitudine のではなく、むしろ、親近性のゆえに採用されたのである。しかし、もし誰かが「人間は泳ぐという点で魚 picses と類似したものとなったのであり、そこから“piscina”という名前が産まれたのだ」と語るとするなら、これに反論することは愚かしいことであろう。というのも、これら二つの説明のいずれも〈ことがら〉と不適合ではなく、いずれも曖昧だからである。しかし私たちは、このひとつの実例によって、幸運にも、（一）親近性から獲得された〈ことば〉の起源と（二）類似性から引き出された〈ことば〉の起源とを区別することが可能となる。

ここから、（ことばの起源の）前進は、≪反対物≫にま

で至った。すなわち、“lucus”（森、木立）は、明るさが最も少ない quod minime luceat ところからそう呼ばれ、“bellum”（戦い）は“bella res”（心地よいことがら）ではないところからそう呼ばれ、また“foedus”（条約）は“foeda res”（恥ずべきこと、不潔なこと）ではないところからそう呼ばれるのである。ただし、ある人々が考えるように、“foedus”が“foedus porci”（豚の不潔さ）からそう呼ばれるのだとするなら、“foedus”の起源は《親近性》に還元される。「生起するもの」id quod fit が「生起の媒介」id per quod fit によって名づけられているからである。

というのも、《親近性》なるものは、広範囲にみとめられ、多くの部分に分割されるからである。すなわち、（一）〈影響力〉efficientia による場合。これはたとえば、今掲げた名前（“foedus”）が“foedus porci”に由来する場合である。つまり“foedus”は“porcus”「を媒介として」結果する efficere のである。また、（二）〈結果〉effectus による場合。これはたとえば“puteus”（井戸）という語の場合である。というのも、“potatio”（飲むこと）という語はこれ（puteus）の結果そう語られるのだと信じられているからである。さらに、（三）「（当のものが）そこに保たれているもの」id quo continetur による場合。たとえば、人々が“urbs”（町）を“orbis”（円）から名づけられたものとする場合である。（町となる）場所は、予兆を占う鋤によって囲まれるのが常であり、ウェルギリウスも、「アエネイスは鋤で町（の範囲）を決める」（*Aen.* V. 755）という箇所で、鋤のことを想い起こしているからである。またさらに、（四）「保持の媒体」id per quod continetur による場合。たとえば、もし誰かが“horreum”（穀倉）という語は“hordeum”（大麦）という語から、一文字が変化することによって名づけられたと認めるその場合である。また（五）「拡張使用」abusio による場合。たとえば、私達が“horreum”（穀倉）と語りながら、その語に“triticum”（小麦）（の意味）を隠す condo 場合である。これには二つの場合があり、（a）全体が部分によって名づけられる場合、たとえば、“gladium”（剣）を“gladium”の先端である“mucro”（切っ先）と呼ぶ場合、また（b）部分が全体によって名づけられる場合、たとえば“capillus”（毛髪）が“capitis pilus”（頭の毛）として quasi 語られる場合がある。

およそ私は、ここを超えてどこへ赴くことがあろうか。何か別の事例が数えられるとしても、読者は≪ことばの起源≫が次のものに含まれることを知るであろう。すなわち、(一)〈ものと音との類似〉similitudo rerum et sonorum であるか、(二)〈もの相互の類似〉similitudo rerum ipsorum であるか、(三)〈親近性〉vicinitas によるか、あるいは、(四)〈反対物〉contraria によるか、の何れかである。

私たちは、≪ことばの起源≫を〈音の類似〉soni similitudo を超えて追求することはできない。のみならず、このことですら常に可能というわけではない。なぜなら、〈ことば〉の内には、説明を与える rationem reddere ことが可能な起源を持たないものが無数にあると私には思われるし、また、起源が隠れているものも無数にある、とストア派の人々も認めているからである。

4 ストアの〈言語起源論〉の脈絡

このテキストには、擬音語や擬声語に言語の成立を求めるストア派の人々の言語起源論が詳細に述べられている。これによれば、特定の〈もの〉が特定の音声によって名付けられる仕方には、次の四通りの場合がある。

1 特定の〈もの〉が特定の〈ことば〉(音声)によって名付けられる第一の根拠は、「〈もの〉と〈ことば〉(音声)との類似」に存する。この類似が言語を成立せしめる根源であり、「ことばの揺り篭」cunabula verborum である。したがって、言語の第一の起源は擬音語や擬声語に求められる。

2 特定の〈もの〉と別の〈もの〉とが相互に類似している場合、その〈もの〉がそれと類似した別の〈もの〉の有する名称によって名付けられることがある。

3 特定の〈もの〉と別の〈もの〉とが近親関係にある場合、その〈もの〉がそれと近親関係にある別の〈もの〉の有する名称によって名付けられることがある。この近親関係には、(一)影響力、(二)結果、(三)保持の場所、(四)保持の媒体、(五)拡張使用などがある。

4 特定の〈もの〉と別の〈もの〉とが反対物の関係にある場合、その〈もの〉がそれの反対物である〈もの〉

の有する名称によって名付けられることがある。

そしてこれに続くテキストでは、彼らの語る「〈もの〉と〈ことば〉との類似」についてさらに詳細な考察が行われている。

このテキストは、*SVF* 二に引用されるストアの言語起源論のテキストとその内容において軌を一にする。*SVF* 二・一四六には次のような記述がある。

深遠かつおそろしい議論が、名称の本性についての議論がここにたち現れてくる。すなわち、名称は—アリストテレスが考えたように—人為的なものなのか、それとも—ストア派の人々がそうみなしたように—自然本性的なものなのか、という議論である。というのも、最初の〈音声〉は、その〈音声〉がそれの名称とされる〈事物〉に類似していたのであり、ストア派の人々はこの考えに従って語源論の様々な要素をも導き出しているのだからである。（オリゲネス『ケルソス論駁』第一巻二）

そして、つづく一五四～一六三には、ストア派の人々が個々の語の起源をどのように説明したかの実例が述べられているのであるが、われわれかぜ今見た『問答法について』第六章のテキストも、*SVF* のこれらのテキストとその内容において軌を一にするものと考えられるのである。

ではストア派の人々がかかる言語起源論を主張する根拠はどこにあるのだろうか。以下われわれは、ストア派の言語起源論の背後にある彼らの思想の構造を見て行くことにしよう。[6]

4・1　哲学の部分としての〈ことばの学〉

ストア派の人々は、哲学（φιλοσοφία）を三つの部分に区分した。〈ことばの学〉（λογικόν）は、〈自然学〉（φυσικόν）および〈倫理学〉（ἠθικόν）と並ぶ一つの部分とされている。

4・2　表象・把握・観念

〈ことばの学〉は〈問答法〉と〈弁論術〉とに区分されるが、ストアの人々はこれらの議論に先立ち、独自の認識論を展開した。

4・2・1　表象と幻影

人間の魂は、「球形の頭部」に位置する〈主導的部分〉（ἡγεμονικόν）にその中心を宿しているが、ここから五感を形成する感覚器官に向かって気息（πνεῦμα）が延びている（七一、八三六）。[7] 何らかの外的物体が感覚器官に働きかけると、この気息を媒介にして物体としての魂の内に、ある種のパトス（受動状態）が生じる。これが〈表象〉（φαντασία）と呼ばれるものである。ストアの人々は、これを「刻印」（τύπος）、「変容」（ἀλλοίωσις）などと呼んだ（五八～六〇）。

〈表象〉は、外的物体の働きかけの結果生ずるものであるから、単にそれ自体を魂に示すのみならず、その作動者（外的物体）をも示す（五四）。だがこのことは、外的物体が常に同一の仕方で表象を惹き起すことを意味しない。ある表象は、その作動者を十全な仕方で示すものとして魂に生起するが、別の表象は、その作動者を不完全な仕方でしか示さないのである。ストアの人々は、前者を〈把握的表象（φαντασία καταληπτική）＝把握をもたらす表象〉、後者を〈把握されない表象〉（φαντασία ἀκατάληπτος）と呼んだ。把握的表象は「実在する事物に由来する表象」とされ、把握されない表象は「実在する事物に由来するのではない表象」とされる。狂乱状態や鬱状態にある人々の思い描く妄想などの〈幻影〉（φάντασμα）は把握されない表象にすると考えられた（五四、六五）。

4・2・2　把握としての感覚認識・知識・学問

魂の主導的部分が把握的表象に対して〈同意〉（συγκατάθεσις）を与えると、そこに〈把握〉（κατάληψις）としての感覚認識が生起する（九〇）。他方、把握されない表象に対して同意が与えられた場合には〈おもいなし〉（δόξα）が生じる。感覚認識は、外的物体によって魂に惹き起こされた受動に対して魂の主導的部分が能動的に関わることによって生起するのである。「同意には……何か非自発的なものがあるとともに、何か自発的なもの、われわれの判断に依存するものがある」（九一）という語、あるいは、「感覚とは同意と把握である」（七二）という語は、感覚認識におけるこのような受動と能動との関わりを示している。

人間の魂は、このようにして獲得された感覚認識を把握として有するが、彼はさらに、みずからに備わったロゴス

を用いてこれらの感覚認識から様々な事項を論証によって結論することによって、さらなる把握を獲得してゆくことができる（八四）。そしてこのような把握が揺らぐことのないものとなったとき、把握は〈知識〉（ἐπιστήμη）となり（九三）、様々な把握が特定の目的のもとに体系づけられたとき、〈学問〉（τέχνη、技術）が生ずる。「学問とは様々な整えられた把握よりなるひとつの有益な目的のための体系」（九五）である。ストア派の人々がしばしば語る「把握は知識とおもいなしとの中間にある」（九〇）という語は、把握の中間的性格を示している。

4・2・3　観念と先取観念

かかる把握や知識は、「様々な命題の集積」としてもたらされる。人間は自らの知識を、主語や述語などよりなるロゴス（命題・文）の形で把握するのであり、この点に、他の動物と比較しての人間の認識の特徴がある。「われわれはロゴスを有することによって『ロゴス的なもの』と名づけられる」（八三、八三b）という主張は、かかる人間の把握の特徴を示す語にほかならない。

さて命題や文は、それを構成する要素（主語や述語等）の結合によって成立するのであるから、命題や文が成立するためにはそれを構成する要素（たとえば、「ソクラテス」、「人間」、「歩く」等）が何らかの形であらかじめ魂の内に蓄積されているのでなければならない。ストアの人々はかかる命題や文の構成要素を〈観念〉（ἔννοια）と名づけ、これの起源と性格とについて論じた。

人間の魂の主導的部分は、誕生の時には「白紙」である。幼児期の把握は非ロゴス的なものであり、人間は、様々な感覚認識を通して様々な観念を「自然本性的に、非人工的に」主導的部分に書き込んで行く。このようにして書き込まれた観念は〈先取観念〉（προλήψις）と呼ばれ（八三）、魂の主導的部分のロゴス的枠組みを形作って行く。魂の主導的部分が先取観念に満たされ、ロゴス的なものとして完成されるのは七歳の頃であるとされる（八三）。

先取観念に満たされた魂は、相互の「教示とみずからの注視によって」（八三）、さらに様々な観念をみずからの〈主導的部分〉に書き込んで行くことができる。また魂は、みずからが有する能力によって、外的事物が存在しない場合でも様々な観念を想起することができるのみならず、これらを自由に結合・分割・拡大・縮小して、現実には存在

しないもの（たとえばヒッポケンタウルス）の観念をも作成することができる（八七〜八八b）。

だが、魂がこれらの観念を有しているからといって、観念に対応する事物が実在するわけではない。実在するのは、命題の形で把握される物体（たとえば「歩いているソクラテス」）のみであり、命題の構成要素（主語・述語等）としての観念に対応する事物、〈観念されるもの〉（ἐννόημα）は、外的実在の世界にその根拠を有することのない幻影（φάντασμα）＝魂の物体的変容）に他ならないのである（八三）。彼らは、このような考えから、共通観念としてのイデアの存在を否定し、アカデメイアの人々を批判した（二・一一二〜一一四、二七八、一・六五）。

4・3 〈表示するもの〉としての音声

これらの考察に続き、問答法の本論が始められる。問答法の考察は、〈表示するもの〉（σημαίνον）としての〈音声〉φωνή に関する考察と、〈表示されるもの〉（σημαινόμενον）としての〈レクトン〉λεκτόν に関する考察とに区分される。問答法が音声に関する考察から始まる、という点については、ストアの人々はほぼ意見を一にしていたようである（一三六）。

4・3・1 音声・言葉・文

音声とは、「振動する空気」、「空気の振動」、「空気における振動」、「聴覚に固有の対象」などと定義される（一三八〜一四一）。ストア派の立場では、物体のみが作用を及ぼす（一四〇）が、このような「他者に作用を及ぼす物体」（一四二）としての音声が、〈ことばの学〉を成り立たしめる「言語」の質料的基礎をなすのである。

音声は、〈分節化したもの〉（ἔναρθρον）とそうでないものとに区分される。動物も、みずからの衝動を表現するために叫びなどの形で音声を用いるが、人間の発する音声は、（一）それが思惟（διάνοια）によって発せられ、（二）分節化した音声である、という点で動物の発する音声とは異なっている（一四〇）。人間は、これらの分節のそれぞれに文字（γράμμα）を割りあて、これらを〈言葉の要素〉（λέξεως στοιχεῖα）と呼んだ。言葉の要素には、ギリシア語のアルファベットに対応する二四個のものがあり、その内の七個は母音、六個は子音と呼ばれる（一四〇）。この理由から、分節化した音声はまた〈文字として書き表

すことのできる音声〉（φωνὴ ἐγγράμματος）とも呼ばれる（一四〇）。

分節化した音声が、たとえば「昼」のような単語の形になると、それは〈言葉〉（λέξις）と呼ばれる。言葉には、一般の単語のように何かを指し示すものと、「ブリテュリ」ように何も指し示さないもの（無意味な単語）とがある（一四〇）。ストアの人々は、言葉を、それが言葉の結合体である〈文〉（λόγος）の中で果たす役割に応じて、名称（ὄνομα、固有名詞）、共通名称（προσηγορία、普通名詞・形容詞）、動詞（ῥῆμα）、接続詞（σύνδεσμος）、冠詞（ἄρθρον）の五つ（場合によっては「中間のもの」（副詞）を含めて六つ）に区分し、これらを〈文の部分〉（τὰ τοῦ λόγου μέρη）ないし〈文の要素〉（τὰ τοῦ λόγου στοιχεῖα）と呼んだ。この〈文の部分〉は partes orationis とラテン訳され、紀元四世紀に成立するラテン文法学の品詞論の中核を形作って行くことになる。

複数の言葉（単語）がその固有の文法的役割（＝〈文の部分〉としての役割）に従って配置・結合され、ひとつのまとまりをなすと、ここに〈文〉（λόγος）が成立する（一四三）。文は、みずからを構成する言葉（単語）がそれぞれの文法的役割に従って配置・結合されている限りにおいて、何らかの事物を表示するが、この事物は〈ことがら〉（πρᾶγμα）、事態）と呼ばれる。文は、外的実在として物体的に存在するもののみならず、存在しないものをも〈ことがら〉として表示することができ、その限りで、文が何らかの〈ことがら〉を表示する、という事態は、表示される〈ことがら〉の（物体的）実在如何とは無関係である。「語る」（αὐδῆ λέγειν）という語が固有の意味で用いられるのは、この文についてであり、文を構成する言葉については、「発する」（προφέρειν）という語が用いられる（一四〇、一四四、一四九b、一六七）。ストア派の人々が〈レクトン〉と呼ぶのは、文によって表示される〈ことがら〉にほかならない。

4・3・2　言語の起源、語源論、格、時制

さて、ストアの言語理論が登場した当時、ひとつの「深遠かつおそろしい議論」（一四六）が、言語（とくに名称）をめぐって交わされていた。「名称は［人間の］制定になるものなのか、それとも、自然本性的なものか」という議論である。この「制定（θέσις）―自然本性（φύσις）」

の問題提起は哲学史の中でよく知られたものであり、言語の問題としては、プラトン『クラテュロス』などにもあらわれているが、ストアの人々は、「名称は自然本性的なものである」と考えることによってこの問題に答えようとした。すなわち、「最初の音声は、音声がそれの名称とされる〈ことがら〉に類似していた」（一四六）と考えることによって、言語（名称）の起源と性格の問題を考えようとしたのである。このような仕方で、言語の起源と本質を擬声語や擬音語に求めることは、言語の考察を「他者に作用を及ぼす物体」としての音声から始めたストアの人々にとっては、むしろ当然なことであったといえよう。

こうして、問答法においては、音声（ないし文字）としての〈言葉〉とそれが指し示すものとの間の対応関係・相即関係が様々な仕方で探求されて行くことになる。同義性（συνώνυμα）や多義性（ἀμφιβολία）に関する詳細な議論（一五〇～一五三）、語の派生（etymologia、語源論）についての煩瑣ともいえる記述（一五四～一六三）、名詞類の「格」（πτῶσις）とそれらの語によって示されることがらとの関係に関する議論（一六四）、動詞の時制をめぐる語形（加音が付加されているか否か等）と語の指示内容との間の相即関係に関する説明などは、このようなストア言語論の脈絡において理解されるべきであろう。

4・4 〈表示されるもの〉としての〈レクトン〉

以上述べられた音声に関する教説に続いて、〈表示されるもの〉としての〈レクトン〉についての教説が語られる。

4・4・1 〈レクトン〉とは何か

〈レクトン〉は「語る」（λέγω）の動詞的形容詞の中性形単数で、元来「語られうるもの」の意味である。前節で述べられたごとく、言葉（単語）の結合体としての文（λόγος）は何らかの〈ことがら〉（πρᾶγμα）＝事態）を示し、「語る」（λέγω）という語がその固有な意味で用いられるのは、かかる〈文〉についてであった。〈レクトン〉とは、この「文が示す〈ことがら〉」にほかならない（二・一四九b、一六六、一八一）。したがって、〈レクトン〉は、端的にいえば「文の意味」ということになる。

〈レクトン〉は、〈出会うもの〉（τυγχάνον）、および〈音声〉（φωνή）との関連において、すなわち、〈出会うもの〉―〈音声〉―〈レクトン〉の三項構造において捉え

られる（一六六）。わたしが「歩いているソクラテス」という物体を見て「ソクラテスが歩いている」という文を発した場合を考えてみると、この場合の〈出会うもの〉は「歩いているソクラテス」という物体であり、〈音声〉は「ソクラテスは歩いている」という文である。そして〈レクトン〉は「ソクラテスは歩いている」という音声によって示される〈ことがら〉である。これら三者の内、〈出会うもの〉と〈音声〉は物体であるが、〈レクトン〉は、「非物体」（ἀσώματον）であるとされる（一六六）。新プラトン派のアンモニオスは、この主張をうけ、ストア派の語る〈レクトン〉を「ペリパトス派の意味での思考内容（νόημα）と事柄（πρᾶγμα）との間の中間物」とみなし、それの存在を批判している（一六八）。

〈レクトン〉が非物体であるとの主張は、少なくともふたつの根拠から行われていると考えられる。第一に、〈レクトン〉は、それに対応する外的実在(物体)とは無関係に存立する。たとえば、「ソクラテスは歩いている」という語によって示される〈レクトン〉は、物体としてのソクラテスが歩いていない場合にも存立する。そして第二に、〈レクトン〉が主語や述語など（＝観念（ἔννοια）の複合体（＝文）として存立する（一九九）のに対して、実在する物体は複合体として存在するのではない。〈出会うもの〉として存在するのは、主語や述語に分割できない「歩いているソクラテス」という単一の物体なのであり、主語や述語に対応する存在としての〈観念されるもの〉（ἐννόημα）は、実在的根拠を有しない幻影（φάντασμα）なのである。

4・4・2 〈完結したレクトン〉と〈非完結なレクトン〉

さて、〈レクトン〉は〈完結したレクトン〉（λεκτὸν αὐτοτελές）と〈非完結なレクトン〉（λεκτὸν ἐλλιπές）とに区分される。〈完結したレクトン〉とは、「ソクラテスは書く」のように完結した文（λόγος）の形で表現される〈レクトン〉であり、〈非完結なレクトン〉とは、「書く」のように不完全な文の形で表現される〈レクトン〉である（一八一）。

〈完結したレクトン〉には、文の種類に応じて様々なものがある。何らかの事実を叙述する〈命題〉、諾否で答えられる疑問としての〈決定疑問〉、疑問詞をともなった疑

問文で表現される〈補足疑問〉、さらには、〈命令〉、〈誓い〉、〈嘆願〉、〈語りかけ〉、〈疑似命題〉（命題の表現をもちながら、冗長であったり感情表現であったりして命題とはいえないもの）、〈疑念〉がここに数えられている（一八六）。

これらの内で、真ないし偽となりうるのは〈命題〉（ἀξίωμα）のみである。そしてストアの人々が問答法において目指したのは、個々の命題の真偽と、命題の結合によって形成される推理の真偽とをいかにして正しい仕方で判定するか、ということであった。

5 『問答法について』第六章の〈言語起源論〉の意図

以上が、『問答法について』第六章におけるストア派の〈言語起源論〉の背後にある思想である。では、『問答法について』の著者は、いかなる意図によってストア派の言語起源論についての詳細な記述を行ったのであろうか。

先に引用された『問答法について』第六章のテキストの直前の箇所を見ると、およそ言語起源論なるものに対する著者自身の強い疑念が表明されている。

> しかし、私の意見によるなら、この事項は、必然的なものというよりはむしろ好奇心に関わるものであろう。……特定の〈ことば〉についてその起源を説明するということによって、確かに大きな助けを得ることにはなろうが、それの追求が全く無際限となるような、そのようなことがらを追い求めて行くということは、無益なことであろう。というのも、何であれ語られたものが一体どのような起源からそのように語られたのか、などということを一体誰が見出すことができようか。ここでは〈ことば〉の起源が、ちょうど夢の解釈と同じように、個人個人の（勝手な）創意によって判断されるのである。

そして、その少し後の箇所では、それにもかかわらず著者がストアの言語起源論について述べる根拠が次のように述べられる。

> けれども私は、読者諸氏に、今手短にのべたこの場所、

つまり〈ことば〉の起源についての場所を僅かの間受け入れてほしいと思う。それは、私たちが、すでに手掛けた著作のひとつの部分を無視したと思われないためである。

これらのテキストから次のことが分かる。

1　『問答法について』の著者は、ストア派の言語起源論を必ずしも承認しているわけではない。

2　それにもかかわらず、これについての論述が行われるのは、言語起源論が当時の読者にとって問答法の扱う主題として広く認知されていたからである。

われわれは、この事実から、当時広く普及していた言語理論に注意を払いながらもそれに満足せず、独自の言語理論（問答法）を構築して行こうとする『問答法について』の著者の姿勢を見ることができるであろう。

6　『問答法について』の言語理論の独自性

では、『問答法について』の著者独自の言語理論はどのようなものであろうか。われわれは最後に、これまで述べられたストアの言語理論を『問答法について』と比較することによって、『問答法について』の言語理論の独自な部分を列挙することにしたい。

6・1　sentire-intellegere の二元論

まず第一に言えることは、『問答法について』の著者が、ストアの人々の唯物論的世界観とは異なる〈二元論的世界観〉に立脚している、ということである。

すでに述べられたごとく、ストアの人々は、魂が有する表象を「魂の主導的部分より流出する気息」の働きと、魂が外界からの物体的働きかけの結果として有する〈受動状態〉（πάθος）によって説明し、この表象理論をもとに言語理論を構築した。

他方、『問答法について』の著者は、〈可感的なもの―可知的なもの〉の二元論、ないし〈感覚―魂〉の二元論に立

脚してみずからの言語理論を構築している。『問答法について』第五章冒頭の〈ことば〉の定義は、このことを鮮明に示している。

〈ことば〉は、いかなる〈もの〉の〈しるし〉でもある。これは〈語るもの〉によってもたらされると、〈聴くもの〉によって理解されることが可能である。およそ〈もの〉は、感覚されるか、理解されるか、あるいは隠されているかのいずれかである。〈しるし〉とは、それ自体が感覚されるものでありながら、それ自体とは別に何かを魂に示すもののことである。

この記述からすると、『問答法について』の著者はストア的世界観に立脚していたというよりも、むしろプラトン的世界観に立脚していた、というべきであろう。

6・2　個々の単語への注目

第二に言えることは、『問答法について』の言語理論がストアの言語理論と比較して、個々の「単語」に積極的な位置を与えている、ということである。

『問答法について』第一章では、〈単純なことば〉と〈結合したことば〉との区別が述べられている。この区別はストア派にもあり、彼らはことばを ἁπλοῦς λόγος と σύνθετος λόγος に区分している。だが、ストア派の考えでは、文として完結した〈結合したことば〉が表示するものはあくまで一個の〈完結したレクトン〉ないし〈事態〉であり、複数の〈レクトン〉ないし〈事態〉なのではない。Sext. Emp. は、この点にストア派の言語理論の矛盾を認め、「ストア派の人々は完結した命題を複合物にしようとしている」と非難している（*SVF* 二・一九九）。

他方、この点についての『問答法について』の主張は首尾一貫している。著者は〈単純なことば〉と〈結合したことば〉との区別を述べたのち、

> 単純な〈ことば〉とは、……何かひとつのものを意味表示するものである。（第一章）
>
> 〈結合したことば〉とは、相互に結びあって複数の〈もの〉を意味表示するもののことである。（第二章）

と語っている。そして第五章で述べられる“dicibile”は、ストアの〈レクトン〉とは異なり、あくまで個々の単語に即して語られているのである。[8] B.D. Jackson (*op. cit.*, p.122, n.3) は、『問答法について』の verba simplica と verba coniuncta との区別は、ストア派言語理論に由来するというよりは、むしろアリストテレス『カテゴリー論』第二章に由来するものと考えているが、[9] この指摘は正当なものと考えられよう。

6・3 dialectica の区分の相違

このような「単語の重視」は、ストア派の体系とは異なった問答法の体系を生じせしめる。ストアの問答法は、言葉の学 λογικόν のもとに弁論術と並んで位置づけられるものであり、これは、〈表示するもの〉としての音声を扱う部分と〈表示されるもの〉としての〈レクトン〉を扱う部分とに区分される。だが、『問答法について』第四章に提示される dialectica の区分（前掲）は、

1　みずからの内に eloquientia を含み、

2　「単語について論じる部分—文について論じる部分—推論について論じる部分」の構造をとっている

という点において、ストア派の問答法の体系とは根本的に異なっている。この体系はむしろ、ペリパトス派の「範疇論 → 命題論 → 分析論」の体系に近いと言えるであろう。

6・4 「言語を媒介として言語について論じる」という明確な意識

第四に、『問答法について』の著者は「言語について論じることは、〈しるし〉を意味表示する〈しるし〉signum signorum によって初めて可能になる」という明確な意識をもっている（第五章）。他方、ストア派の問答法においては、かかる signum signorum についての議論はほとんど見受けられない。そして改めて述べるまでもなく、signum signorum に関する議論は、アウグスティヌスの『教師』*De Magistro* の中心主題のひとつである。

6・5 〈言語起源論〉から〈しるし—もの〉へ

以上述べられた『問答法について』の言語理論の枠組みを考慮に入れるとき、われわれは「なぜ『問答法につい

て』第六章でストアの言語起源論がかくも長大に引用されたのか」という問に対する見通しを得ることができよう。『問答法について』第六章 でストアの言語起源論が引用されたのは、

1 当時広く流布していた言語起源論なるものが、恣意的かつ際限のないものであることを示し、
2 読者をして著者独自の言語理論の枠組みへと導いて行くため

であったのである。その枠組みは、これを敢えて名付けるならば〈しるし-もの〉の枠組みとでも呼ぶことができよう。

7 まとめ

以上の考察から、われわれは『問答法について』の著者の内に次のような姿勢が存していたことを知ることができる。

『問答法について』の著者は、ストア派の言語理論やアリストテレスの論理学（さらには文法学）[10]を援用し、必要に応じてこれらを変容させて、独自の言語理論を構築しようとしている。

かくしてわれわれは、『問答法について』の著者を、ストアの言語理論について正確な理解をもちながら[11]、これを独自の仕方で変容し[12]、さらにはアリストテレスの『カテゴリー論』を独力で理解したアウグスティヌス[13]である、と考えることができるのではなかろうか。

[資料一一] 『訂正録』*Retractationes* 第六章

Per idem tempus, quo Mediolani fui baptismum percep turus, etiam disciplinarum libros conatus sum scribere interrogans eos, qui mecum erant atque ab huiusmodi studiis non abhorrebant, per corporalia cupiens ad incorporalia quibusdam quasi passibus certis vel pervenire vel ducere. Sed earum solum de grammatica librum absolvere potui, quem postea de armario nostro perdidi et de musica sex volumina, quantum attinet ad eamdem partem, quae rhythmus

vocatur. Sed eosdem sex libros iam baptizatus iamque ex Italia regressus in Africam scripsi; inchoavereamquippe tantummodo istam apud Mediolanum disciplinam. De aliis vero quinque disciplinis illic similiter inchoatis, de dialectica, de rhetorica, de geometrica, de arithmetica, de philosophia, sola principia remanserunt, quae tamen ipsa perdidimus, sed haberi ab aliquibus existimo.

わたしは、受洗準備のためにミラノにいたとき、諸学芸の書物を書こうとしていました。わたしは、当時生活を共にし、このような学びを毛嫌いしてはいなかった人々との議論によって、物体的なものを媒介として、いわば確実に一歩一歩昇って行きながら、非物体的なものにまで到達し、彼らをそこにまで導いて行こうとしていたのです。しかしこれらの書物のうちでは、ただ『文法学』一巻のみが完成されましたが、この書物は後になって私たちの書庫から紛失してしまいました。また『音楽論』六巻ですが、この書物は「リズム」と呼ばれる部分まで書きました。しかしこの六巻の書物は、わたしが洗礼を受けて、イタリアからアフリカに戻って書いたものです。それはただミラノで書き始めたにしか過ぎません。他の五つの学芸についての書物も、同様にそこで書き始めました。問答法、修辞学、幾何学、算術、哲学についてのものです。しかし、それらはただ始めの部分が残っているだけです。わたしはこれらを紛失してしまいましたが、誰かがもっていると思います。

[資料—二] PL XXXII, Col. 1385-6.

DE LIBRO DE GRAMMATICA ET TRIBUS PROXIME SEQUENTIBUS OPUSCULIS

Librum de Grammatica Augustino in prius excusis attributum inter supposititia censemus opuscula ob eam in primis causam, quia methodo aeque et scopo totus discrepat ab eo, quem ipse in lib. 1 Retract., cap. 6, una cum aliis disciplinarum libris a se Mediolani jamjam Baptismum percepturo elaboratum recognoscit. Quippe hos libros conscripserat dialogi forma, eoque animo ut *percorporalia ad incorporalia, quibusdam quasi passibus certis*, ut ibidem ait, *vel perveniret, vel duceret*. Ipsi nimirum a tempore suae conversionis religioni fuit operam dare litteris dein-

ceps, nisi illae Christo servirent, ex lib. 9 Confess. cap.4. n.7. Porro autem subjectum hic opusculum neque dialogi formam gerit, neque ad incorporalia promovet animum. Id praeterea eruditi alicujus scriptoris nedum tanti viri solertiam non refert, quae tum maxime singularis et summa apparet, cum se ipse in re exercet per se humili ac vulgari. Confer libros de Musica, nec non eum locum libri 2 de Ordine, ubi disciplinarum inter se ordinem, earumque occeasionem, naturam et proprietates leviter perstringit: hinc profect intelliges non quidpiam passim obvium, aut quod omnium pedibus tritum esset, de grammatica fuisse ab ipso litteris commendatum. Quae sane rationes non minus valent adversus tria alia, quae huc pariter conjucimus opuscula, quae inscribuntur, Principia Dialectiacae, Categoricae decem, et Principia Rhetoricae. Scrupulum injiciebat clausula capiti 7 lib.1 Retractationum assuta, scilicet: *Hoc opus sic incipit, Omnia nominatredecim,* quod initium est libri sequentis. At fraudem deteximus ex Mss. tum veteribus, tum etiam recentioribus, qui eam non habent.

『文法学』およびこれに続く三つの小品について

『文法学』は、以前の説明ではアウグスティヌスに帰せられていたが、われわれはこれを偽作の小品の内に数えた。その理由は何よりも次の通りである。—『訂正録』一・六によると、「わたしは受洗準備のためにミラノにいたとき、諸学芸の書物と共に『文法学』を書こうとしていた」ことを認めているが、(現存の)『文法学』は方法においても意図においてもこの書物とは矛盾する。

すなわち、アウグスティヌスはこれらの書物を「対話篇の形式で」執筆し、また、同じ箇所で語っているように、魂において「物体的なものを媒介として、いわば確実に一歩一歩昇って行きながら、非物体的なものにまで到達し導こうとしていた」。彼は明らかに、キリスト教への回心の後、諸学問(litterae)に従事していたが、それら諸学問は、『告白』九・四・七によれば、「キリストに仕えるもの」にほかならなかったのである。

だがその一方、目下の小著作(『文法学』)は、対話の形

式をとってもいないし、魂を非物体的なものへと導くこともない。この著作は、ある教養ある著作家のものではあるが、かくも大いなる人（アウグスティヌス）の特性を、つまり、アウグスティヌスがそれ自体としては卑俗的・通俗的な事項を扱う際に個別的・全体的に何よりも現れる特性を担ってはいないのである。

『音楽論』を参照するがよい。また彼が、諸学問相互の秩序、状況、本性、適合性を短くまとめている『秩序論』第二巻の箇所を参照するがよい。読者は、これらの箇所から疑いの余地なく理解するであろう。すでにあらゆる人々によって論じ尽くされたことであるが、「『文法学について』がアウグスティヌスによって文字に委ねられた」ということは十分明白ではないのである。

この論拠は、ここでわれわれが同様に偽作と推定する他の三つの著作—『問答法の原理』、『十のカテゴリー』、『修辞学の原理』に対しても同等に妥当することは明らかである。

また『訂正録』一・七に付加された末尾の語は次のような困難を抱えていた。すなわち、「この著作は『およそ名称は一三の』という語で始まっている」という末尾の語が『文法学』の冒頭と一致していたのである。だがわれわれは、この語を有しない諸写本—これには古いものも新しいものもある—からこれが虚偽であると結論した。

註

（1） *Retractationes* c.6.［資料—一］

（2） Augustine, De Dialectica, Translate with Introduction and Notes by B.Darrel Jackson, Dordrecht / Boston, 1975, p.25.

（3） PL XXXII, 1385-6.［資料—二］

（4） この文 sententia の区分は、ストア的であるが、「〈結合したことば〉は複数のもの res を意味表示する」という考え方は、ストア派の考えとは明らかに異なる。ストア派では、複数の語が結合して文を形成するとき、その文によって表示される *σημαινόμενον* が〈完結したレクトン〉*λεκτὸν αὐτοτελές* と呼ばれ、これが *πρᾶγμα*（単数）呼ばれた。

（5） ここでは、真偽を表示しない文（命令文、嘆願文等）を扱う部分が "*de eloquendo*" として *dialectica* の下に包含されているが、この区分は〈ことばの学〉*λογικόν* を問答法 *διαλεκτικῆ* と弁論術 *ῥητορικῆ* とに区分したストア派の学問区分とは明らかに異なっている。この区分は、〈結合したことば〉の内、「文を完成しないもの」（ストア派の

λεκτὸν ἐλλιπές) を取り入れている限りにおいてストア派の *sententia* 論を取り込んでいるが、〈単語—命題—命題の結合〉という区分を採用している限りにおいて、〈範疇論—命題論—分析論〉の構造をとるアリストテレス論理学を受け継いでいる。

(6) 以下の記述は、拙訳『クリュシッポス「初期ストア派断片集二」』京都大学学術出版会、二〇〇二年二月収録の解説「クリュシッポスの〈ことばの学〉」(五八五～六二三頁)によっている。本稿で扱えなかった事項については、同解説を参照いただきたい。

(7) ここでは、魂の〈主導的部分〉(ἡγεμονικόν) のありかを *SVF* 二・八三六に従って述べたが、〈主導的部分〉を「心臓」にあるとする考え方もある(二・八三七～九)。

(8) 筆者の私見では、『問答法について』の "dicibile" は、ストアの λεκτόν をラテン訳し、それを独自の仕方で変容させたものであろうと推察される。

(9) Categ. 1a16ff.「語られるものの内あるものは結合において、あるものは結合なしに語られる。結合において語られるのは、たとえば『人が走る』、『人が勝つ』である。結合なしに語られるのは、たとえば『人』、『牛』、『走る』、『勝つ』である」

Τῶν λεγομένων τὰ μὲν κατὰ συμπλοκὴν λέγεται, τὰ δὲ ἄνευ συμπλοκῆς. τὰ μὲν οὖν κατὰ συμπλοκήν, οἷον ἄνθρωπος τρέχει, ἄνθρωπος νικᾷ· τὰ δὲ ἄνευ συμπλοκῆς, οἷον ἄνθρωπος, βοῦς, τρέχει, νικᾷ.

(10) 『問答法について』とラテン文法学との関係については本稿では論じなかったが、拙稿 Augustine and De Dialectica — A Consideration on Author's Intention of the Work. (*Studia Patristica* Vols. XXIV-XXVIII, pp.350-54) および「アウグスティヌスと *De Dialectica*— 著者問題に関する文献学的考察—」(『中世思想研究』第三四号二三～四四頁、中世哲学会、一九九二年九月) を参照。

(11) たとえば、*Contra Academicos* 三・一三・二九におけるストアの「論証されない議論」λόγοι ἀναπόδεικτοι (*SVF* 二・二四一、二四五) の正確な引用。

(12) たとえば「真 verum と真理 veritas」(*cf. SVF* 二・一三二) や「内なる言葉」(*cf. SVF* 二・一三五) の思想。

(13) *Conf.* 四・一六・二八。

＝ 討論 ＝

第一〇一回教父研究会
二〇〇二年六月二九日　於聖心女子大学
監修　柴田　有
記録作成　佐藤真基子

柴田　有

De dialectica という著作は私もよく知らないが、第VI章を見ると、そこに出ているストア派の言語起源論の紹介はかなり長い。書いてある文章のうちどこからどこまでがストア派の意見でどこからが著者のもので、著者が言語起源論に対してどのようなスタンスをとっているのかが見極めにくい。ここにはその道の専門家が揃っているので、大いに発言していただきたいと思う。

■ ストアのどの流れを対照するか

神崎　繁

水落さんがストア派に関心をもっていらしたことは前々から存じ上げている。今回は本格的な翻訳をなさり、もちろん *De dialectica* そのものは前にも翻訳なさっていたものではあるが、前置きでもおっしゃられたように、今回はその翻訳の成果をふまえてお話くださったと思う。二つ伺いたいことがある。仮に *De dialectica* がアウグスティヌスの著作だと考えて、どこまで *De dialectica* がストア派に忠実であったか。そして水落さんはそこからアウグスティヌスの独自性をおっしゃったわけであるが、そのときもとにあるストア派を、どこに起源を求めるのか。今日ご紹介くださったのは、古ストア派の断片にもられている前期ストア的な考え方である。しかしストア派の歴史はその後も続き、ローマ時代に入ってくる頃に変わってくる。そのとき、今日のお話の途中でも言われた parties orationis いわば品詞論と言われる文法論的な事柄、特にバビロニアのディオゲネスと呼ばれるクリュシッポスの弟子はかなり文

法的なことをやっていて、そこから、ギリシャにおけるヘレニズム期の文法学の始祖と言われている、トラキアのディオニュシオス・トラクスの中にもられている考え方はストア的だと言われているが、アウグスティヌスはストアから来ているのか、それともいわゆる文法学の中に流れ込んだものから受け取っているのか。アウグスティヌス自身の文法学はわれわれには知られないわけだが、水落さんがおっしゃった比較はつまり古ストアの考え方であって、アウグスティヌスが依拠していたものはもう少し中間項的なものではなかっただろうか。その中間項が言われないと、どこまでアウグスティヌスの独自性があるのか、その間にいろいろなものが紛れ込んでいてそれがアウグスティヌスの中に受け継がれている可能性もある。その点が気になる。

もう一点は、ではアウグスティヌスは独自性を発揮して、それは特に sentire と intelligere という二つの区分、二層に分けて考えていることがその独自性であるとおっしゃられ、アリストテレスの影響があるとおっしゃられた。その二つの区別は、直接にはおっしゃられなかったが、アリストテレス的な何ものか、むしろプラトン的とおっしゃられたと思うが、その場合アウグスティヌスの独自性というとき、漠然と新プラトン的なものやプラトン主義的なものを考えるのか。それとも最後におっしゃられたようにアリストテレスの影響を考えるのか、今のところどのように見通しをつけているのか。

さらに、お話を伺った範囲では、ストア的な要素は非常にたくさんあるが、むしろアリストテレス的な要素はあまり明示的にはないように思う。特に発表稿で、「ストアの体系とは根本的に異なっている。アリストテレスの『範疇論→命題論→分析論』にむしろ近い。」とおっしゃったが、もう少し具体的に、アリストテレスの体系に近いとする指標が *De dialectica* の中にあるのかどうか伺いたい。

水落　健治

まず第一点目。アウグスティヌスが典拠としたストアが、後期ストアとどのような関係にあるのかという問題。今日はお話しなかったが、研究史で一番問題となってきたのはそこである。一番初めにマウリナ版の編纂者が問題提起をし、クレケリウスという人が本文批判と本文中にある対話編の萌芽（二人称の動詞）を指摘した。その後フィッシャーがそうした問題の先鞭をつけた。フィッシャー自身は先ほ

ども言ったように、アプレイウスの *De dialectica* との比較をした。アプレイウスはご存知のようにマダウラの人であるから、アウグスティヌスのいた地方の人である。そしてフィッシャーは結論として、ヴァロを出した。ヴァロのディアレクティカの教科書である。しかしその教科書は現存していない。そしてフィッシャー以降長い間、ヴァロのディアレクティカに起源を有しているとする説があった。しかしゲリウスの『アッティカの夜』という著作の中に、ゲリウスがアッティカ平和図書館でヴァロのディアレクティカの教科書を探したが見つからなかったという記述がある。ゲリウスは、ヴァロのディアレクティカを探し出してもよさそうなものなのに見つからず、ヴァロの先生（Aelius Stilo）のものしか見つからなかったとしている。その箇所を典拠として、ヴァロのディアレクティカというものがあるとするならそこで見つかったはずであろう、という議論がなされている。この議論に関するコロキウムの報告が、一九八九年に出ている。この報告では、そもそもヴァロのディアレクティカというものはあったのか、という疑問が提起されている。この参考文献の最後で言われているのは結局、いろいろな資料から、ヴァロのディアレクティカの内容は、他のところで証言されていることを突き詰めていくと、どうも合わないという議論のようである。長い間、ヴァロのはギリシャのストア派のものをラテン語訳した教科書のようなものだったろうという区分がベーシックであったが、最近ではそもそもそのようなものがあったのかという議論になってきているようである。それを最初に言ったのはフィッシャーである。

しかし、発表稿にあるディアレクティカの区分、loquendo, eloquendo, proloquendo, proloquiorum, summa といった言葉はゲリウスにほとんど同じ形で出てくる。したがって私自身は、ゲリウスが何らかの役割を果たしている気がしている。また『神の国』の中でゲリウスが紹介されており、知識人であったとアウグスティヌスが言っている。よってゲリウスが何らかの仕方で通路としてあるのではないかという気がしている。また、キケロの哲学的な著作をコンピューターで検索してみると、「命題」という言葉で一番使われているのは ecfatum という言葉である。おそらくこれは *De dialectica* で出てくる用語系統とは違うのではないかと思う。しかし *De dialectica* の方に出てくる用語があるかどうかは、これから探さなければならないと

思っている。また、summa という言葉はいろいろなところに出てくる言葉であって、「結論」という意味ではクインティリアヌスの中には出てきているのでクインティリアヌスを読んでいたのではないかという気がするが確定的ではなく、やはりゲリウスの系統と、ゲリウスとヴァロのつながりをもう少し研究してみたい。

それから、アウグスティヌスの独自性ということであるが、*De dialectica* という著作を長い間読んできたが、一番典型的なものは dicibile の概念が独自であると思う。dicibile という語を何の先入観もなく読めばストアのレクトンということになると思うが、ジャクソンは、dicibile という言葉は他のどの著作にも見つからないと言っている。私自身長い間探してみたが、少なくとも概念というニュアンスで言われているような意味での dicibile はない。ジャクソンはマルティアヌス・カペラなどを探してもないと言っている。では dicibile とは何かと考えてみると、推測ではあるがおそらく、素直に読めばこれはレクトンのラテン語訳と読めるのであるから、どこかでストアのレクトンみたいなものを、ラテン語でアウグスティヌスは聞いたのではないか。しかしレクトンと dicibile の根本的な違いは、単語レベルで言うか文章レベルで言うかの違いであり、それは決定的なものである。だから推測ではあるが、アウグスティヌスはそうした言葉を聞いて、その意味を変えたということではないかという気がしている。またストアのことで言えば、「真理」と「真なるもの」という区分が、私が訳した中にもあるが、これらはラテン語に訳せば veritas と verum であり、それらについての断片を見ても、ストアとアウグスティヌスでは随分違うと思う。それから「内なる言葉」ということについてもアウグスティヌスの著作には出てくるが、ストア派とまったく違い、別の脈絡ではないかと思う。そうしたことを考えあわせてみると、アウグスティヌスは学問的な仕方でストアやアリストテレスを読んだというよりもむしろ、当時のミラノならミラノの、知識人たちの社交の中で哲学的ないろいろなものを学んで、独自な仕方でずらしていっている、すり替えていっているという気がしている。しかしまだ最近思い始めたことなので、もう少し突っ込んでみないといけないと思っている。

神崎　繁

だいたい分かりました。今ヴァロのことが出ましたが、

私もヴァロのことが念頭にあり、ジャクソンが言っていることであるが、マルティアヌス・カペラの *De dialectica* との共通のソースがあるのではないかと……。

水落　健治

それを最初に言っているのはフィッシャーです。

神崎　繁

はい、フィッシャーのようですね、私はフィッシャーを読んでいないのでジャクソンからの知識に過ぎないのですが、そのときに、まず一つは、ヴァロはある種のプラトン的な教養を持っている人ですから、そこで既に変容は起こっていて、ストアに対する相対的な距離、つまり私の予想では、アウグスティヌス自身がストアに最初に距離をとっているというよりは、そのソースである、仮にそれがヴァロであればヴァロにおいてすでに距離がとられている。その一つの根拠は、ストアはこの著作の中で言語起源論 De orgine verborum 、いわばオリジンの話をしている。ところがストア派はあくまでも語の正しさ、いわゆるエティモロギア etymologia と言った時に、語の起源がどこにあるかではなくて、語は正しくものを表しているかということを問題としている。これは先ほど言及された、『クラテュロス』の影響がかなり強いのではないかと思う。最近ストアの関係で、プラトンのエティモロギアについて、プラトンの『クラテュロス』という対話篇はとても不思議な対話篇で、どうしてあれほどエティモロギアに熱を入れているのかということに関して、ケンブリッジ大学のデイビッド・セドリー (Sedley) が、*Journal of Hermeneutic Studies*、にとても啓発的な論文を書いている。そして、『クラテュロス』の中に出てくる言葉の語源解釈は、何でもかんでもやっているのではなくて、一つは神の名前、もう一つは神や天体の名前、いわゆる theologia cosmologia に関する用語、それから、nous や phronesis など哲学用語を分析しているとして、それは単にプラトンが語源をやっているのではなくて、その言葉がどういう事態を表しているかということを通して、自分自身の概念相互の整理をしていると解釈している。それは非常に説得的であると思う。それは或る意味ではストア派がやっていることである。特にそれはストア派の場合、今日お話になったように、物質世界の構造そのもの、物としての世界の構造と、我々の言葉が

どのように合致しているかという親和性、我々の言葉あるいは精神活動との相即性を証立てるためにやっているのであって、決して言葉の起源がどうであったかという、ルソーやヘルダーの考えた言語起源論ではない。そうすると、いつも我々の使っている言葉がどこまで世界を正しく表しているのか、ということになる。それに関していえばアウグスティヌスの *De dialectica* に紹介されているそれは当に言語起源論になっていると思われる。そうすると本来のストアの考え方を、悪い意味で言えば捉えていないということになる。その責任はその中間項にあると思う。アウグスティヌス自身は、もし本来そういうソースがあればもっと反応していたはずだと思われる。ヴァロを悪者にするつもりはないが、既に教科書的な、文法学的な知識の中に取り入れられた、あるいは lingua latina の中に取り入れられたような、薄められたストアの知識といった印象を持っている。本来のストアの考え方は、かなりプラトン的なものを受け取りながら、自らの唯物論的な世界像の中で表現しようとしたし、そのエティモロギアもそういう意図を持っていたのではないかという感じをもっている。

水落　健治

ストアのやろうとしていたことが、起源というよりはいわゆる相即性だということは、全くその通りだと思う。というのは、例えば、加音が付いたからどうだとかいう話は、まさにそういう話だし、格の話もまさにそういう話だと思う。そういうことで今神崎さんが指摘された面で見ると、*De dialectica* には、そういうものは一切欠如していると思う。ここで引用したように、unde（語の起源）ということで言っているのだから、扱われてくる題材そのものは重なっているのだけれども、どういう脈絡で言われているかという面で開きがあるという気がする。

熊田陽一郎

発表稿を見ると、語源研究上いろいろな拡張用法のようなものがあり、それは浴槽が魚から来た、というようなもので、それは分かるのであるが、親近性、類似性ということがまだ分からない。また、反対物から出てくるということ、例えば森や木立は、lucus という言葉が、明るさが最も少ない、quod minime luceat ということから出てくるということは、深遠というかこじつけというか、今ひと

つ分からない。また殊に、bellum は bella res であるということは分からない。なぜアウグスティヌスがこういうことを考えたのか、ストアから受け取ったのか、彼自身の独創なのか分からないが、そうした反対物ということまで出てくるということは、例えばそこに、哲学的な弁証法のようなものも入っているのか、それとも単に言葉の起源論としてこういったことを考えていたのか、その辺のことを伺いたい。

水落　健治

結論を言うと、分からない。というのも、私が訳したストアの断片の中には反対物の話はない。逆に言うと、この *De dialectica* のテキストが一番詳しい。これ以外に無い。

■　言語起源論の評価をめぐって

樋笠　勝士

水落先生の発表原稿途中の言葉、「*De dialectica* の著者」という表現がどこまで続くのだろうかと心配していると、最後の最後、まとめのところで、「アウグスティヌス」と断言されており、ここまで引き延ばされた感覚を持っていた。その根拠がいろいろと挙げられているわけだが、賛成する部分もあるが、いくつか気になる部分がある。

まず、発表稿の説明である。「言語起源論に対して *De dialectica* の中で批判的な言及があり」、結局それが、「恣意的且つ際限のないものであることを示すという意味での、否定的なものの見方をアウグスティヌスはしている」としている。この否定的な見方というのは、どういうことなのか伺いたい。例えばアウグスティヌスの他の著作を見ても、短いものだが、似たような、verbum が verberare というような話がすぐに出てくる。そうしたことが一つの文化的伝統として彼の中に根付いていて、自然に出てくるという感じがある。それでもアウグスティヌスが意識的に、こうして伝わってきた言語起源論を正面から批判的に扱うとした場合に、それはどういうことなのか。先ほど神崎先生がおっしゃった点と関わるが、ストア派の場合は、音と事物との間の、physei か thesei かということに関して、physei であるということを言うための議論としてこの言語起源論は出てきたとして、アウグスティヌスも *De dialectica* を

書くときに、physeiという点をいくらか考えて、それをも含めて否定する、と水落先生は考えるかどうかという点が一つである。

加えてもう一つは、ストア派ほど、音が意味に直結しているとアウグスティヌスが考えておらず、ここで先生がおっしゃっている、しるしとものとの間の枠組みが、新たなアウグスティヌス的な展開であると見た場合、この新たなしるしとものの関係をもう少し説明していただきたい。先生はそういう「枠組み」とお書きになっている。このしるしとものの枠組みを非常に単純に捉えると、もちろんストア派にもあるし、いろいろなところに見受けられるが、問題はその間の関係である。それは音と意味になるかも知れないが、それが、アウグスティヌスのどのような独自な枠組みなのか。そうした記号的な、受動的指示関係のようなものがストア派に濃厚にあって、アウグスティヌスにはそうではない、というようなことをお考えになっているのかどうか。physeiの考え方でいくと、その間の関係はとても緊密なものになると思うが、そうではないとお考えになるなら、その新たな枠組みというのは何であるのか伺いたい。

水落　健治

まず第一点であるが、樋笠先生がおっしゃったことはまさにその通りである。おっしゃったように、verbum-verberare ということはアウグスティヌスの中で非常にたくさん出てくる。そうしたいわゆるアウグスティヌスの真正著作の中に出てくるエティモロギッシュな考え方と、ここでの、エティモロギーがネガティブに扱われていることの関係であるが、私はやはり、この著作についてアウグスティヌスが *Retractiones* で言っていること、それは発表稿資料のところであるが、「物体的なものを媒介としていわば確実に一歩一歩のぼって行きながら非物体的なものにまで到達し、彼らをそこにまで導いていこうとしていた」、その意図が、*De dialectica* には強いような気がする。前に私は第五章の研究をしてきて、その第五章でも、signum signorum の話が出てくる。つまりある種の上昇の話が出てきて、そもそも言葉について論じるということはどういったsignum によって可能か、signum signorum によるのではないか、という話で、メタ言語の話まで持っていく。そうしたことを重ね合わせてみると、やはりこの著作にはどこかにそうした意図があって、その意図が前面に出てい

るのだとすると、この第六章のところでエティモロギーがネガティブに扱われたということも納得がいくのではないかという気がしている。だからここでアウグスティヌスが語源論を否定しているとまでは、私は思わない。むしろ、例えば『告白』の最初のところで、子供がどのように言葉を学ぶかという議論があり、最後に societas の中に出ていったということをアウグスティヌスは言うが、初めは手や足を動かして、それではコミュニケーションが出来ないからということで言語を学んでいく、その助けとなるものとして自然言語のようなものをアウグスティヌスは語っている。そうしたことを考えても、physei な相即性といったものを否定はしておらず、むしろポジティブだと思う。やはりこの著作には著者の意図というものがあると思う。

また二番目の点、res と signum であるが、この著作の最初の（I、II）、結合語と単純語、plures res と unum quiddam のこのresというのは何なのかと実は昨日ずっと考えていた。コメンタリーを読むと、例えばリューフ（H. Ruef）は、これはセミオティッシュなものであるという言い方をしている。しかし私は、そこで言われているresということは、曖昧なものではないかというのが今のところの結論である。というのは、例えば五章で、dictio と dicibile, res, verbum という四つのモメントが出てくるが、そこで出てくる res と前述の res は違う。では res とは何かと探しても、分からない。第一～四章までの、つまり本論に入る前の、序論で言われている res がどのように使われているかを探したが、よく分からない気がする。しかし、単語というものに則して（単語レベルで）res ということを言っていることは明らかなので、その意味では、res ということを何らかの形では考えていたのだろう。結局、もう少し後の、*De magistro* や *De doctrina christiana* になれば、res がどういうものになるのかはっきりしてくると思うが、ここではまだはっきりしていない。

上村　直樹

二つ質問がある。一つ目は、先ほど神崎先生が、アリストテレス的な要素として何が具体的に挙げられるかという質問をされた。このことに関して、例えばレジュメの中で、ディアレクティカの区分の仕方について、これがアリストテレスの「範疇論→命題論→分析論」の体系に近いということであった。そこで伺うのだが、「みずからの内に elo-

quentia を含む」ということに関して、これはどういう位置づけを持っているのか。要するに、分類が違うということだが、このことが、どういった独自性なのか、或いはこれが何かこの後のアウグスティヌスの展開に関わるのか、といったことをお聞きしたい。

またもう一点は、発表稿冒頭のところで、マウリナ版の編纂者たちが四つの問題点を出して、*De dialectica* は真正性が問われる著作であるという主張をしたが、特にその中では *De dialectica* の内容がストア的な性格を有しているという点で問題となったとしている。ではその四つ挙げられている中の、他の点に関してはどうであったのか。例えば、対話篇の形式をとっていないということは読めばその通りではあるが、それが真正性の問題とどう関わるのか。単純に、その時期の他の著作が対話篇の形式をとっていないとしても、この著作は *Retractationes* の中でアウグスティヌスがテキストブックとして書くと宣言しているからには、真正であるということも言えるかと思う。その他のことに関して、研究史のところで挙げられた新しい人々が何か見解を述べていることがあれば教えていただきたい。

水落　健治

二点目の質問に関してまずお答えしたい。実を言うと、発表稿資料のところであるが、これはマウリナ版編纂者が批判をしている全文である。これは実はラテン語も変で訳も苦労したが、まあ、こういうことだろうということである。読んでいただければいい。そのまとめは一番最後のところにあるが、私はこれを読んで、マウリナ版の人たちはとてもいい加減だなあという感じをもった。なぜそう思ったかというと、いくつか理由はある。まず当時の学問状況はそんなものだったろうと思うが、一番基本的には、やはり『告白』という著作をベースに考えているという気がする。つまり、『告白』と違うから真作ではないだろうという論調のように聞こえてしまう。例えば二つ目のところに、「そこ（i.e. カシキアクム）で私が行った litterae に関する仕事は、すでにあなた（神）に仕えるものであった」とあるのは『告白』の引用であり、すると結局『告白』というものをベースにして、これと違うから真作ではないと言っているような気がしてしまう。マウリナ版の批判に関しては、私はそういうイメージをもつ。

それから、対話篇の形式をとっていないというのは、上

村さんの今言った通りで、「議論する中で書かれたということが即対話篇という形をとるのか」という問題が出てくる。その問題はすでに、クレケリウスという人が指摘している。さらに言うならば、そもそもマウリナ版では、「文法学およびそれに続く三つの小品について」というようにひとまとめにしている。ところが先ほどの、アウグスティヌスの *Retractationes* の記述からすると、これは無くなったとかこれは最後まで書いたとか、一つずつ微妙に言っていることが違う。だがマウリナ版はそれらをひとまとめにして、「おかしい」と言うわけである。研究史の中ではその辺が問題となって、議論が展開してきたという事情がある。だが、上村さんの指摘されたことはまさにその通りだという気がする。また少し先の話をすると、その後で、アウグスティヌスの初期著作と『告白』とのずれという問題をめぐって、研究史の中では、アウグスティヌスの回心の問題として発展していく。私が最近考えるのは、それは回心の問題にとどまるのか、ということである。初期の著作が『告白』と違うからということでその回心を疑うというのではなくて、もっと広い脈絡の中でアウグスティヌスという人を考えなければならないという気がしている。最近ハンナ・アーレントの書いた『アウグスティヌスの愛の概念』が ICU の千葉先生によって翻訳されてそれを読んだが、その最初のところでアーレントはきちんとした指摘をしていて、アウグスティヌスの愛の問題を扱うのはとても難しい、なぜかというと、アウグスティヌスにおいては常に複数の問題が併存しているからだと言っている。また先日この教父研究会でピーター・ブラウン先生が、晩年のアウグスティヌスの書簡について研究発表をしてくださったが、その中で、ある人が「レトリカに凝ってしまっている息子がレトリカを勉強した方がよいかどうか」と晩年のアウグスティヌスに聞いてきて、「キケロを読みなさい」とアウグスティヌスが言っているということを紹介して下さった。そうしたことを考えても、私はやはり、『告白』をベースにして『告白』の筋から外れているからこれは真正なアウグスティヌスではないとするのは間違っていると思う。アウグスティヌスは忙しかったし、神学的な著作をたくさん書いたがそれ以外の、例えば eloquentia についても rhetorica についてもやはり意識は持っていて、アーレントも言うように、若いときからアウグスティヌスの中にはいろいろな問題が併存しているのではないかと思う。

それから一点目についてであるが、これは私自身の中でまだ整理ができていない。発表稿で、eloquentia がここに含まれているのはどういう意味を持っているのか、ということであると思うが、これはこのシステムの中で考えれば至極整合的であるという気がする。つまり、まず単語ということがあって、次に単語の結合ということがあって、そして単語が結合しているが文にまでなっていない句などが（a）で論じられ、文が（b）で論じられ、真偽が問題にならないものがiで、iiで一つの命題、iiiで命題の結合としての推理が論じられる、というように非常にシステマティックである。ただ問題は、真偽が問題にならないような、つまり真か偽かと quaerere してもだめなような文 sententia や、あるいはそれをめぐって disputatio しても仕方がないような文が、なぜ eloquentia になるのかということがあると思う。また第七章で、言葉の力 vis verbi という話が出てくる。それは、例えば x という気息音はそれを聞いただけで怖い思いがするでしょうという話であるが、その問題とこの eloquentia がどうつながるのか、がまだ私には見えない。

■ 言語起源論の評価をめぐって（続）

柴田　有

私は海が好きなものだから、魚の名前に関心がある。最近も驚いたことが一つある。こちらでカサゴと言っている魚がある。冬時獲れる赤いおいしい魚であるが、それは関西ではガシラと言い、四国の方ではホゴまたはホーゴー、九州ではアラカブと言う。それぞれに魚を見てそこから受ける印象と音声とが対応している。このように視野を方言の問題にまで広げて考えるのだが、世界の事物を音声に表すときに、我々の学習の過程からいけば、文化的に決まっているものを受け取るとしか言えない。文化的に決まっており、それぞれカサゴとかガシラ、ホゴといった音声が我々の観念や想念を形作る力は違っているのではないか。例えば、カサゴというのは優しい感じがするし、ガシラというのは荒々しい感じがするとか。我々が事物を捉える捉え方、これは文化ごとに決まっている。言葉を語るという局面で、これは大事なことなのではないか。そうした事態は、先ほど水落さんが引用された『告白』第一巻においても、子供

が言語を習得する過程で、アウグスティヌスは神のsalusがあったと肯定的に評価している。先ほど仰った自然的言語はこの第一巻では所作身振りであるが、その次の段階として、自分でも外界とコミュニケーションがとれるようになっていく段階があり、そこでは文化的に決まった言語を覚える。それが自分にとってsalusになった、という。とすれば、今日のストア派の言語起源論として紹介されている馬の嘶きや水がはねる音や方言などは、神の恵みとして肯定的に評価してよいものだったのではないか。そう思うので、第Ⅶ章のvis verbiの問題の中に、何かそれがつながっていくのではないかという印象を私はもっている。

柴田美々子

De dialectica の第章のテキストを見ると冒頭では、言語起源論について、この言葉がどういう起源をもっているのかは、やっても仕方がないと言っているような印象を受ける。そういう話があって、章の後半になると、「tamen しかし起源論については言わなければならない」ということがあり、また最後の方で、「vide tamen paululum（はっきり分からないが）しかしちょっとこのことだけは見て下さい」とあり、この tamen は極めて強いと思う。「quomodo perveniri putant ad illa verborum cunabula vel stirpem... ストア派が言っている≪言葉の揺りかご≫にどのように辿り着くことができると彼らは考えているのかということだけは」ということ、つまり、個々の言葉の起源がどうかよりも、quomodo ということだけは見ておいてほしいと言っている。そして先の例にもあった、v の音がどのような働きをしているかということにつながるわけである。そこで、このテキストでは、illa verborum cunabula とストア派の言葉を言い、それを「あるいは根ver stirpem」と言い換えている。そして potius atque adeo sementum... と、よく分からないがとにかく「むしろ」という形で、さらに言い換えていく。ストア派のテキストを見ていないと、それがこの著者の言葉になっている感じさえする。こういうことにはつき合わないと言いながらもこれだけはおさえておいてほしいと、今までのことが全て総括されるような形である。最初の方はおつき合いでやるという形であったが、最後の方では、個々の言葉の語源は分からないがそれでもストア派の言語起源論の方法論、根本的な見方、音と言葉の関係はこの *De dialectica* の著

者もおそらく強調しているのではないか。

水落　健治

結局こういうことである。――私が疑問に思うのは、完全にネガティブであればなぜ言語起源論の話をこれほど長くやるのか、という話である。だから完全にはネガティブではない。やはり何らかの形で、こうした議論と自分自身との接点を見出したいのだろう。